



2015年度 最終成果報告会・同志社ローム記念館大賞発表会

高まる緊張感。年に一度、劇場空間ははりつめた空気に包まれる。
8チームとも活発な活動と高い成果をアピール、委員による賞の選考でもかなり難航したようだ。
大賞発表会では、受賞を逃して悔し涙を流すメンバーもあり、各チーム活動の充実ぶりが伺えた。



「みんなの記憶に残る報告会になったでしょうか。」

この報告会を運営するのは「スタジオZero」。
アカデミー賞の受賞式をイメージした会場装飾や記念品のデザイン、賞の選考時間を活かした交流会の企画運営、司会進行まで、約3ヶ月をかけて準備した。
プロジェクト活動を支える立場で継続して活動を展開するスタジオZeroにとっても、この報告会がひとつの節目となる。念入りに準備をしたつもりでも、ちょっとしたミスや思いがけないトラブルもある。彼らにとっては長い長い1日だ。
「みんなの記憶に残る報告会になったでしょうか。」閉会后、企画統括を努めたメンバーがぼつりつつぶやいたことばが印象的だった。





VR Agency

●プロジェクトリーダー
雨森千周 (同志社大学理工学部)

●プロジェクト責任者
林田 明 (同志社大学理工学部教授)

●メンバー数 22名

<授賞理由>

手軽に宇宙旅行ができるVRのシステム開発を行い、質の高いアプリを公開している。そのプロセスにおいてメンバーそれぞれのスキルアップが見られ、チームとしての一体感も感じられた。また、旅行者として興味深いパンフレットを作成し、今後のダウンロード数の増加も期待できる。



「スマートフォンを手に素敵な宇宙の旅へ」

エントリー時から緻密な活動計画を立て、着実に活動を進めた。はじめて使うゲームエンジンでの開発に日々試行錯誤、さまざまなトラブルにも見舞われながらも、予定通り、秋にiPhone向けアプリ「Univeler」をリリース、ユーザーの声を反映し、バージョンアップを重ねている。オリジナルの簡易ヘッドマウントディスプレイが作れるワークショップも展開し、手軽にVR(バーチャルリアリティ)で宇宙の世界が体験できるように工夫した。大人の知的好奇心をくすぐる宇宙旅行アプリ、ぜひダウンロードしてお試しいただきたい。



DIT (Doshisha Institute of Technology)

●プロジェクトリーダー
森本 諒子 (同志社大学理工学部)

●プロジェクト責任者
大久保 雅史 (同志社大学理工学部教授)

●メンバー数 13名

<授賞理由>

同志社からの新たなエンジニア育成を目指し、その目的のために着実に同志社大生を対象としたウェブ勉強会やハッカソンを開催した。勉強会では、多くの初学者にプログラミングの楽しさを伝え、ハッカソンでは複数企業の協力を集めつつ、勉強会の成果を学生向けに発展させた。参加者に対する貢献はもろろんのこと、企業協力を通じた社会的な活動も評価できる。プロジェクト終了後の活動もおおいに期待する。



「プログラミングをもっと身近に」

夏に続き、2回目となる「DIT Winter Hackathon DHacks」が2月19日(金)・25日(木)・26日(金)の3日間で開催された。初心者でも安心して参加できる同志社生によるハッカソンイベントだ。秋学期からの勉強会参加者も増え、今回のイベントには同志社大学、同志社女子大学の学生38名が参加、9チームに分かれて競い合った。「同志社×コミュニケーション」をテーマに、キャンパス間、留学生と日本人学生、サークルと学生…と切り口もさまざま。最優秀の「DIT賞」には、不要になった家具や家電の売り買い、作りすぎた料理のシェアなど、一人暮らしの学生のために「集まる」「分ける」「教える」で交流をはかるWebツールが選ばれた。



外部審査員特別賞

賞状・副賞(記念品)

新商品開発プロジェクトFLap

●プロジェクトリーダー
高橋美瑛 (同志社女子大学芸芸学部)

●プロジェクト責任者
二瓶 晃 (同志社女子大学芸芸学部助教)

●参加団体
グンゼ株式会社・株式会社洛林舎

●メンバー数 15名

<授賞理由>

学生の若々しいアイデアを活かしユニークで斬新なデザインの試作品までこぎつけた成果はとて素晴らしい。プレゼンテーションも工夫がこらされ、アピール力があつた。学生という枠を超えたプロジェクトを展開された。



ベストプレゼンテーション賞 (学生メンバー相互評価)

賞状・副賞(記念品)

DIT (Doshisha Institute of Technology)